
ある少女の憂鬱と。

水月 灯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある少女の憂鬱と。

【Nコード】

N8107I

【作者名】

水月 灯

【あらすじ】

マンホールから落ちて異世界召喚。

巫女やら騎士やら王道的展開の符号は揃っているのに、待っていたのは戦いの日々。

あれ、これって何か違いますか、な女子高生の憂鬱を語る物語。

(一応連作)

ある少女の憂鬱とはじまり（前書き）

ある少女の憂鬱と戦い、という短編から派生し、連作にすることにしました。

あちらを踏まえなくても読めるようにまとめていきたいと思います。当作品は一方通行という微妙な意味でのBLを含みますのでご注意ください。

ある少女の憂鬱とはじまり

むかしむかし、ある所に、神様に愛された一つの魂がありました。神様の眷属であるその魂は、穢れのない白い光のように美しい巫女でした。

ある時、神様は自身がお創りになられた世界が、人々の争いによって荒れていくのを悲しみ、巫女に一つのお役目を与えることにしました。

「そなたに一つに加護と、一つの役目を与えましょう。これからあなたは大地を廻り、その優しい光で、世界に幸福の種を落として回るのですよ」

神様は巫女をとて愛していましたが、ずっと見守ってきた世界のことも大切に慈しんでいらっしやっただので、一番適任だと思われる巫女にその役目を頼んだのでした。

それは悩んだ末のことでした。

何しろ巫女は、純粹すぎて、身を護る術すら持ちません。ですから、何があつても大丈夫なようにと、神様はその身を護るための騎士を作る力を与えることにしたのです。

神様の言葉に巫女が素直にこっくりと頷いた時、神様はその巫女を優しく撫でて、加護を与えました。

そしてその時より、神様の眷属たる巫女は、人の世に生まれることになったのでした。

「……ようやく読めるようになってきた…」

はあ、と小さな溜め息を吐いた少女は、手にしていた子ども向けの本をぱたりと閉じて、傍らにいた存在にちらりと目を向けた。

「んー？あーちゃん、読み終わった？」

にこにこ微笑む顔は天使のよう。

口の周りに焼き菓子の食べ滓をたくさんつけたままの片割れは、大変愛らしいのだけれど、いつまでも子どもっぽい所が抜けないなど少女は苦笑した。

椅子から立ち上がると、高い位置で結いあげた黒髪が揺れる。

給仕していた侍女よりも先に、控えてあった布で口元を拭ってやった。

「海央^{ミオ}、もう少し綺麗に食べなさいね」

「あ、ついてた？ありがとうあーちゃん」

お小言も、えへへと笑ってすまされる。

可愛いからついつい許してしまうけれど、本当は自分が一番この双子の半身には厳しく接しなくてはならないのだろつなど、最近頓に思う。

海央には、この所甘やかす相手が増えてきた。

今だって 射殺さんばかりの嫉妬の視線が、少女の背にぐさぐさと突き刺さっている。

「アリス様もいかがですか？」

侍女に問われ、少女

^{アリス} 有空は首を横に振った。

「私はいりません。さつきお昼を頂いたばかりだし、正直海央を見てたらお腹一杯になって」

あの細い身体のどこに入るのだろうか、と生まれてこの方疑問に思ってきたことを再び考えて、有空は海央を見た。

まだお菓子を食べている。

海央は食べることに眠ることが大好きで、それ以外のことに限っては赤子のように無垢だ。

恐らく、おいしいものを食べている時と眠っている時が、一番いい笑顔をしている。

さらさらの黒髪を撫でてやると、不思議そうに海央は首を傾げた。

こつこつ、小動物的な仕草も実に可愛いと思う。

ふふん、と優越を感じて四対の瞳に見せつけるようにしていると、殺気が増した気がした。

いいでしょう。でもそう簡単には、大事な大事な片割れを、野獣の群れになど放り込むものですか。

高級そうな菓子がいくつも海央の腹に納まっていく様を見ながら、有空はふと、事のはじまりの日を思い出していた。

あの日は、朝からなかなか海央が起きず、高校に遅刻寸前だったために、いつもは使わない近道を通って走っていたのだった。

あと十分、と腕時計を見て気持ちばかりが急ぐ中、海央のあれ？という気の抜けた声が出たかと思えば、隣で地面に吸い込まれていく姿が見えた。

古びたマンホールの蓋が開いていて、その中に海央は落ちたのであ

る。

血相を変えて上着の端を掴んだはいいが、それで助けられるはずもなく 有空は、海央と共に丸い穴の中に落ちて行った。

怪我するとか下水臭くなるか思いつつ、思わず目を閉じていたが、やけに落下時間が長い。目を開いて見ると、暗い暗い闇の中、真下の方に、淡い光が見えた。

下水じゃないと思った時には時遅く、双子はその光に落ちていき

気がつけば、全く見知らぬ場所にいた。

幸いだったのは、気付けば床に座っていたので、怪我がなかったことか。

高い天井、豪華な装飾。煌びやかで豪華な広々としたそのホールには、たくさんの人がいた。

……そして、たくさんのご馳走が並んでいた。

あまりのことに呆然として固まっていた有空の隣で、おいしそうと目を輝かせた海央は、ふにやりと相好を崩し、無垢で美しい、万人を魅了する満面の笑みを浮かべ。

その瞬間、有空は、周囲の人々が天使の矢に胸を射抜かれた音を聴いたような気がした。

そうして人々のざわめきの中、いつの間にか場所を移して連れて行かれた応接間で、見たことも無いほどに綺麗な人々に双子は囲まれることになった。

「あなたは巫女です」と、指を差されたのは海央。

さらさらの黒髪にくりつとした大きな黒い瞳。幼い頃から天使のように可愛いと評判だった、私の双子の弟だった。

何だこの展開はとぼけっとしていたら、四人の青年が跪いて、いきなり 海央の手を取り、口づけた。

それを見た瞬間、私の思考停止していた脳は活動を再開し、瞬時に動き、海央を背後に隔離していた。

人の弟に何してくれるんじゃない、というわけである。

小さい頃から、純真無垢で人を疑うことを知らず、すぐに迷子になつたり誘拐されかけたりしていた弟を護ってきたのは私だ。

同じような顔の造りをしているのに、女の私よりも妙な色香のある海央は、同性にもよくもてていた。

対して私は、やや釣り上がった目のせいか、物心ついた頃から剣道をしていたせいか、凜々しいだの格好良いだの言われ続け、これまた同性に人気だった。

性別が反対だったらよかつたのにねとは、何度も言われたことだ。

とにかく　ぽやんとしてる海央は、放っておいたら狼の餌食になつてしまう。そんな勘が働いて、私は海央の前に立ちはだかつたのだった。

思えばその時四人と散らした視線の火花が、私の戦いのはじまりだったのだろう。

こぞつて海央の結婚相手として名乗りを上げたのは、この国の王太子であるルーゼリアス・リヒトヴァイン・ゼクス。銀の髪に海色の瞳の優しげな美貌の才気あふれる次代の王と。

この国一の天才と名高い宰相、ライルディーン・サイラス。金の髪と藍色の瞳を持った伶俐な印象を与える美しい容姿の無表情の青年に。

人の身でありながら精霊を使わずに魔術を扱えることから、魔法使いと称された異能者、青銀の髪に紫の瞳の人形じみた美青年であるリオルキーツ・エルノーヴァ。

そして、世界でも一二を競うと謳われる剣の腕を持つ、多くの武勳を上げてきた鬼才、赤い髪に朱色の瞳をした精悍で端正な顔立ちをした人目を引く容貌のレンスロット・アリオンの、四人。

対する私の名は、佐久間^{サクマ}有^{アリス}空。

ほんの少し前まで地球の日本で、ただの女子高生をやっていた十六歳。

現在、巫女という役目を負った双子の弟、海央を護る騎士として働いている。

マンホールから異世界召喚。

女子高生。

巫女。

騎士。

美形。

ここまで符号が揃えば、ある種の流行りに則り、一般的な王道展開のはずが　何か違う。

何故自分は異世界に来てまで、弟の貞操を護っているのだろうか、疑問に思いつながら。

今日も私は騎士として、奴らとの攻防を繰り返しているのだった。

ある少女の憂鬱とはじまり（後書き）

王道展開なはずなのに何か違う。

首を傾げて悩む主人公が書きたくて出来た話です。

感想など頂けると喜びます。

ある少女の憂鬱と勤労

男は皆、狼だ。

それを初めて言った人は実に正しかったのだということを、マンホールに落ちてから実感した。

双子の片割れの服を掴んだままに落ちた古いマンホールの穴が通じていたのは、嫌な臭いのする下水ではなく、異世界だなんて地球の誰が信じるだろうか。

元々、小説や漫画の類を読むのは好きだったから、分類として「異世界トリップ」系の話が日本には数多く存在することは知っていた。異なる世界の存在を信じていたり、今の現実よりは素敵な場所があると夢見る人は多かったと思う。自分は、まあそんな非現実的なことに巻き込まれる要素はなからうと日々を過ごしていたのだけれど。まさか、こんなことになるうとは。

「…巫女様におかれましては、ご健勝でいらっしやることをお喜び申し上げます。いつもお見えしてもお美しい…どうか私にも、その美しい瞳に映らせて頂く栄光をお与えくださいませ」

延々と口上を述べる男はまだ若い。

確か、どこぞの貴族の長男だったかと思う。

男は柔和な笑みを浮かべると、敬意を払うように、勝手にその白い手を取り、唇を落とそうとし　ひやりと頬に触れたものに気付い

て、硬直した。
そしていつの間にか、触れていたはずの巫女の手は彼の手から消えていた。

「お客人、失礼ですが、巫女に容易く触れることは禁じられているとお聞きしていらっしやいませんか？」

低く咳かれた声音と、巫女に良く似た顔に浮かべられた笑みは凄絶で、男は呼吸が止まりかけた。

あつという間に麗しの巫女は視界からいなくなっている。

目の前に立った少女の、剣呑な空気があまりに恐ろしくて、男は微動だにしなかった……否、指先を動かすことすらできなかった。

そしてそのまま、我に返る前に、屈強な護衛達によって、その場を追い出される。

男の言動は侍女達から別の者に伝わるだろう。

社会的にどのように制裁されるかは、自分には関係ないと、有空はアリス銀の魔剣を腰に戻した。

「…あーちゃん、俺、手汚れた？」

姉が濡れた布でごしごしと手を拭ってくるので、海央ミオは不思議そうにそれを見て問う。

有空は先ほどとは一転して柔らかな笑みを浮かべ、言った。

「おやつの時間になるでしょ。雑菌がついてるかもしれないから」

そう言った瞬間、食べ物で頭が一杯になったららしい海央はきらきらと目を輝かせていた。数秒前の疑問は頭から吹っ飛んでいる。

本当に可愛い子だ、と思う。

これが十六歳の男子高校生だとは、言動からは想像もつかないだろ

う。

だが、海央は意外にも共学だった高校に溶け込んでいたし、勉強も割と出来た方だ。

体育はさつぱりで、教師達を悩ませていたけれど。

……授業中もよく寝ていて、担任の頭痛を引き起こしていたけれど。髪も短く骨格は少年のそれだが、それ以上体型ががちりすることはないだろうという海央は、外見がとも少女めいていて、私服の時は絶対に女に間違えられていた。

向こうにいた時から確かに同性を惹き付けていた弟だが、それでもこれほどではなかった。

あの四人を筆頭に、危機感のない海央に寄ってくる虫　しかもオスばかり　をもうどれ程叩き潰してきたことか、覚えていない。

異世界に落ちた途端、あれよあれよという間に海央は巫女として祭り上げられ、やんごとなき御方としての身分を手に入れた。

巫女はともすれば王家の人間よりも立場が上らしいが、私はただの姉というだけで、力などない。

一目で海央に惚れたらしい男共が海央にあの手この手で迫ろうとするのを止めに入ったことは、普通なら不敬罪ものだっただろう。

実際、投獄されかけた。

けれど海央が止めたのと、いつの間にか私の右手に浮かんでいた不可思議な剣の形をした紋様に気付いた周りが逆に慌てて、私を「巫女の騎士」だと言ったのだ。

「巫女」は、世界を保つための鍵。大地にただ存在するだけで、世界は落ち着く。

特に神秘的な力を持ったとかそういう特別なオプションは一切ない。

力など何も無い。

だからこそ、巫女には自分を護るための特別な騎士がいる。己の身を護る力すら持たない巫女だから、その身を護るために、強い力を持った騎士が必要だったのだ。

人の子として生まれた瞬間に、神から与えられた力を使って、無意識の内に巫女は騎士を選ぶのだという。

私は恐らく半身として生まれ、最も近い位置にいたから選ばれたのだろう。

騎士になると、巫女を護るに相応しい力が与えられるのだとか。

地球にいた時は、右手の甲に紋様なんてなかった。

運動は出来た方だけれど、自分より凄い子はたくさんいたし、一般女子の枠を出ていなかったはずだ。

それが、以前よりも遥かに身体能力が強化された。端的に言えば成人男性を簡単に薙ぎ倒せるような力だ。

ぎよっとするような怪力を得たことや、日本語とは違うこの世界の言葉を何故か解することが出来たことなど、それらは全てこの紋様の巫女の加護のお陰だというが、どうにも半端である。

巫女を護るためには強き力が必要だったのなら、初めから完璧であればいいのに、身体能力が異常に向上したこと以外、ほとんど私は変わっていない。

海央はすんなりとこの世界に溶け込んでいたけれど、私は学ばなければ文字が読めなかったし、竹刀や木刀を握ったことはあれど、「騎士」の命と言える剣だつて直に見たこともない。

仕方ない、ゆつくりと慣れていけばいいのだろうかと思っていた異世界生活初日の夜に、安易な考えは瓦解した。

私の部屋は、海央の隣に用意されていた。

何だか落ち着かなかつたらしい海央と一緒に眠ろうと言ったので、海央の部屋の、大人が五、六人は眠れるような妙に巨大なベッドで

仲良く眠りに就いて暫く　　妙な気配を感じて目を開けた私の目に飛び込んできたのは、すやすよと眠る、天使のような寝顔の海央を食い入るように見つめる四つの人影。

しかも王太子だとか名乗っていた銀髪は、今にも海央に口づけを落としかねない様で　　ぷつん、と頭の中で何かが切れた音を聴いた。

気付けば、ドアの前に仁王立ちになって、恐ろしく低い声で、足元に簀巻きになった四人を踏みつけながら、これを引き取れと護衛の人間に言い放った自分は、今考えれば「騎士」としての本能が暴走していたのではないかと思う。

普段出したこともない火事場の馬鹿力を使って男共を叩きのめし、手近にあったシーツやら布やらで縛り上げたので、次の日は体中が悲鳴を上げていて、寝込んだ。海央が心配して付き添っていてくれたので　　共に眠っていただけだが　　その日は妙なちよっかいを出されることもなく終わり。

その翌日から、昼夜を問わず海央に群がる男達を追い払うことが始まり、私は海央の番犬のように、正しく巫女の騎士となったのだ。

剣の師を無理やり見つけ、何かないかと宝物庫を探して魔剣を手に入れ、教養を習い人間関係を把握し、日々鍛錬を怠らず、騎士の鏡と言われるようになった。

……そう、煌びやかな女性の服とは無縁に、国王から下賜された純白の騎士の正装ばかり纏っていたことから、同性とわかつているはずの女性陣から密かにアプローチを受けることになるとは、思ってもいなかった。

動き回るのに正直スカートは邪魔になる。せつかく動きやすいなと気に入った小姓の服も、それだけは着るなと言われたので　　品性が疑われるとか何とか　　、仕方なく数着もらった騎士服を普段着代わりにしたり、城下の女性が着るような服や男物の服を調達して

着ていたのだ。妙に自分は凛々しく見えたらしい。

スーツを着ると三割増しに格好良く見えるとか言つのも同じ原理だろうか。

誰よりも素敵な騎士だと、うっとり夢見心地に言われたことは忘れられない。

私だって女の子だ、一応。

それなりに、平凡に恋をして結婚して子どもを産んで　なんて漠然とした夢はあつたはずなのだけれど……怪力になったり騎士になったり、求めていた平穩から遠ざかったのは何故だろう。

原因といえば海央が原因なのだろうけれど、誰より大切な半身を恨むなんてお門違いだ。

巫女の騎士として働けば働く程、男は皆狼なのだと知った。もう自分、恋愛なんてしなくていい。

取りあえず暫くは、弟を護ることを第一に考えよう　そう誓って数カ月。

状況は一向に変わらない気がする。

とりあえず、一言。

労働基準法違反と精神的苦痛を与えた罪で、この国の男共を全員起訴してもいいですか。

ある少女の憂鬱と第一の男

お伽噺の中に出てくる王子様は世の乙女の永遠の憧れである。

特に日本の女性は、その言葉に多少なりとも幼い頃には胸をときめかせた覚えがあるだろう。異国の王子様に。

どちらかと言えば自分は戦記などに胸躍らせていたが　　ということとは置いておいて。

現実とはこんなものだろうな、と諦めることがこの世界に来てから多くなつたように思う。

「ミオ、一番好きな食べ物は何だい？」

「うーん……お菓子かなあ……」

「そうか。でも、お菓子ばかりでは栄養が偏ってしまうからね。他には？今日の夕飯はミオの好きなものを頼もう」

「んーと……」

にこにこ微笑む顔は、甘いという言葉が相応しい。

言うなれば言葉にし辛い程の美形、という容姿の青年は、春の陽光にその艶やかな銀の髪を煌めかせ、海の色をした瞳を優しくに睨めていた。

青年の名はルーゼリアス・リヒトヴァイン・ゼクス。この国の王太子である。

外見や穏やかなその物腰は、乙女の憧れの王子様そのもの。

現在、彼は巫女と立派な庭園の東屋でお茶会をしていた。

そして、お茶受けを美味しそうに食す巫女の、顔に掛かった黒髪を自然な動作で耳に掛けてやっている。

びく、とその動作に反応した人物がいたが、肝心の巫女は気にも留めていないので、無言と不干渉を貫いた。

「何でも好きだけど……お魚が食べたいかも」

「そうか、じゃあ今日は魚料理にしよう。 ミオ、ジャムが付いているよ」

しかし、次にその長い指が巫女の口元に触れ、ジャムを拭い取った瞬間、彼の人物は苛立ちを露わにした。

何しろ、ルーゼリアスはその手をそのまま自分の口に持って行ったからである。

純真な巫女は羞恥することもなく、ただ首を傾げた。

「ルー、食べたかったなら、俺の食べ滓なんかじゃなくて新しいのあげたのに。汚いよ」

「ああ、ついね。不作法ですまない。じゃあ、ひとつもらおうかな」

はい、と差し出された小さな菓子。

それを青年は、手で受け取るのではなく、直に口に含んだ。 つ

いでに、巫女の指の先も。

瞬間、微かな金属音がして、抜かれたのは白に近い銀の刃。

犠牲になった自身の髪の一筋がはらりと舞って、ルーゼリアスは冷や汗をかいた。

「…殿下は随分と小賢しく、失礼なことをなさるんですね？」

額に青筋を浮かべながら微笑む少女は、全身から殺気を迸らせている。

何が「つい」だ。明らかにわざとジャムを口にしたらどう、この変態が。しかも菓子を差し出すのまで見越してセクハラしやがってこの野郎。

顔面にそんな暴言を書き連ねた巫女の騎士は、手にした魔剣に更に力を込めた。

斬られそうになったのを紙一重で避けた王太子は追撃の気配に流石に焦り、胸の前に両手を出した。

「ま、まあまあアリス。落ち着いて。これは単なる愛情表現の一つで…」

「へえ…恋人でもない相手にそんなことをするのが愛情表現と。この国の男性は随分と不誠実なんですな」

「いや、一応私はミオの恋人候補だし…」

「…そういえば、先日の夜は命拾いなさいましたね？」

反論など耳を貸さず、有空は言葉を続けた。

恋人候補などと言うのは彼らが勝手に言っていることで、本人はそう思っていないと知っているから。

良い人たちだなあなんて、のほほんぽややんと思っっているのだ、無垢な巫女

海央おとつとは。

つくづく、巫女が絶対不可侵な存在で、婚姻など出来なければ良かったのと思う。

歴代の巫女はほとんど結婚していたそうだ。何ともこの世界の恋愛観の大らかなこと。浮気などはあまり許されたものではなく、基本的に一夫一婦制だそうだが、異性同性は関係ないらしい。

海央が望むなら弟のパートナーは同性でも構わない。しかし、どう

にも純粹すぎるのか、海央は恋をするまでに恐ろしく時間がかかるような気がする。というか、一生しなさそうだ。

人を疑うことを知らず、ぼんやりとして隙のありすぎる海央は、一度既成事実を作られてしまえば、そっか自分はこの人が好きなんだといつのまにか丸めこまれて、勝手に結婚させられるに違いない。それを悟られているようで、時折、夜這いに来る人間がいるのだ。この王太子はまさにその筆頭だった。

「次は斬っても構いませんよね？」

とつてもイイ笑顔で有空は言ったが、背後からそれを止める声があった。

「殿下が悪いのはわかるが、この国の王太子を易々と斬られても困る」

渋い顔で言ってきたのは、彼女が（ほぼ無理矢理）教えを請った剣の師。

ルーゼリアスの乳兄弟であり、王太子の第一護衛騎士たる、黒髪に赤い瞳の年若い青年だった。騎士長に次ぐ実力の持ち主だそうだ。

「…カイル。そうは言っても、いい加減にしてほしいんだけど」

「…二人がこちらに来た当初よりは落ち着いただろう。頼むから、王族殺害はやめてくれ」

苦勞してるな、と有空はふいにこの師が不憫になった。

割と常識人のようだと思っただのが彼を師に選んだ理由だったが、最近の彼はどうも溜め息ばかりついていっているようだ。気持ちはよくわかる。自分の主が自ら危険に向かつて行っているのであれば、護衛としても嫌になるだろう。しかもその理由が夜這いである。

押しかけ弟子にしてもらった有空は、同じ苦勞人仲間として、劍を教えてくれた礼として、いつもこの青年には多少讓歩していた。

「 わかった。ここに居られると手が滑るかもしれないから、消えてくれる」

「…ああ」

殿下、行きますよ　そう言って彼が主人を引きずっていくのは、いつもの光景だ。

最近、彼には警戒するような目で見られることが多い。心配しなくとも、滅してやりたいとは思いが、そう簡単に殺人者になる度胸はないので　というかあんな輩のために手を汚したくはない　大半は杞憂なのだが。

つい、苦勞しすぎて禿げないかなとか失礼なことを考えてしまう有空だった。

さて、害虫は消えた。

「…海央、手がお菓子で汚れてるわ。拭こうか」

先日のように濡れた布を手にし、指の一本一本を綺麗にしていた有空の様子は、周囲からするとどこか鬼気迫っていたという。

ある少女の憂鬱と第一の男（後書き）

王太子登場。一人目ですね。

ある少女の憂鬱と第二の男

巫女の魂はそもそもが神の眷属であり、こちらの世界に属するものだ。

だからこそ、地球程ではないがいくつもの言語が存在するこちらでも、巫女は普通に会話を理解でき、文字を読むことができる。

本人いわく、一番理解しやすい言葉に勝手に変換されて聞こえ、見えるのだとか。

「巫女の騎士」である自分には、言葉が全て日本語に聞こえるし、日本語を話しているつもりなのだが よく考えれば、違う言語を口にしていく気がする。

却って、日本語を話そうとしても難しくなっているこの現状。

国一番の頭脳と称えられる男は言った。

恐らく、世界の垣根を越えた時に、こちらへ適応しやすいようにどこかが作りかえられたのではないかと。

何だか気味が悪い気もするが、それならば言語的なことも、騎士としての能力にも納得がいく。

ただし何故か、私にはこの世界の一般常識と文字に関する知識は授けられなかったらしく 目下、勉強中なのである。

物凄く不本意な相手に教わりながら。

「……聖女祭？」

「そうだ。巫女は神より使わされし幸福の種。人の世を過去よりも平らかにしてくれた存在に感謝して、巫女が居る国で年に一度催さ

れる祭りだ。国民の一人一人が楽しみにしている」

「海央、何かするの？」

「巫女は民の前で手を振っていればいい。問題はお前だ」

「は？」

冷たい藍色の瞳が、何の色も浮かべずにこちらを見る。

驚いたように口を開けた有空に対して、淡々と言った。

「巫女の騎士は、代々その力を祭りで証明することになっている。

早い話が、王と巫女の前で他者と対戦するわけだ」

「はあ！？」

驚きのあまり、バン！ と木製の机に手を付くと、みしりと嫌な音がした。

慌てて手を離す。

金色の髪の白皙の美貌の主は、やや迷惑そうに声を紡いだ。

「壊したら弁償してもらおうぞ」

「…すみません。で、それって」

顔を上げた瞬間、有空は頬を引きつらせ、溜め息を吐いた。

目の前にいたはずの人物は消えている。

どこに行ったかと言うと、近くで転寝をしている愛らしい天使の様子を見に行ったのだ。

すやすよとあどけない子どものように無邪気に眠る巫女は、大変可愛らしかった。

見ているだけで心が和らぐその情景には、鉄面皮だの冷酷無慈悲だのと噂される鬼の宰相ですら、普段ほとんど動かされることのない表情筋が緩むらしい。

当初、そのあまりの変化に周囲は仰天し、青ざめて硬直している誰

かがよく目撃されていた。眉一つ動かさないような人間がいきなり笑いだせば、そりゃあ恐ろしいだろう。

今も、控えていた侍女がぴしりと固まっている。皆も大分慣れてきたかと思っていたが、やはり心臓に悪い現象なのだろう。

どこか柔らかな眼差しで巫女を見つめる青年。

どちらも見目麗しいために、それは絵になる光景だったが、ふと、嫌な予感がして、有空は席を立ち 弟の顔に接近していた相手の目の前に、瞬時に剣を突き出していた。

「 何しようとしてるのかしら？」

低く低く問えば、僅かに聞こえる舌打ちの音。

振り向いた冷徹な眼差しと、暫く睨み合いが続く。

せつかく頬に口づけようと思ったのに邪魔な奴め。

そんなことさせるわけないでしょうがこのムツツリ。

互いに何も喋らず無表情なまま、目でそんなやり取りを繰り返す。

氷がぶつかりあっているかのような無言の戦いに、周囲の気温が急激に下がったかのような錯覚を覚えたとは、その時固まっていた侍女が後に語ったことである。

「んー…」

もぞ、と身動きをした海央の声に、二人は反射的にそちらへ顔を向けた。

もしや起こしてしまったか、と懸念するが、巫女たる少年は目を閉じたまま、へにやりと笑みを浮かべただけだった。

「おいしそー…巨大パフェ…おっきい…」

「……………海央……」

むにゃむにゃと平和な寝言を呟く双子の弟に思わず有空は額を抑えた。

が、隣の男は何故かますます相好を崩している。

あ、侍女気を失った。

全く恋愛対象として見られていないのに、ここの男達は揃いも揃って色ボケだな、と有空は思う。

まあ、仕方がない。様々なことを教わる代わりに海央を同席させるという条件を呑んだのはこちらだ。

あまり十全には知りたいことを得ていないが、大分文字も覚えてきたし、自力で色々なことを学べるようになってきた。幸いなことにこの世界には共通用語が存在し、それは日本語のように漢字・カタカナ・平仮名と別種の文字を組み合わせた複雑なものではないので、英語を覚えるようなものだろう。外国語は苦手科目だったが、切羽詰まってみれば学習のスピードは異様な程だった。知能も発達したのかもしれない。向こうの世界でこれ程理解力が優れていたらなあと考えても仕方がないことを思ってしまう位に。

早く読み書きを覚えてしまいたい。今はまだ、児童書程度しか読めないのだ。

文字を完璧に覚えたら、たくさんある書物が読める。そうしたらこの勉強会ともおさらば、海央を餌にしなくても済む。

四人の男達は、顔を合わせれば火花が散るような天敵揃いである。

なのにその内の一人に教えを乞わねばならなかったことは、有空にとって中々屈辱的だった。

この国一の頭脳と褒め称えられる青年は、若くして宰相という地位に就いたライルディーン・サイラス。

海央の自称婚約者候補その二、である。

王太子殿下がさらっとタラシ的発言を繰り返し、夜這いを掛けるよ

うな男であれば、宰相殿は、普段氷のように無表情な癖に海央に対しては二重人格のように豹変し、さらっと際どい言動を行うムツリスケベ。

この国の人間が聞けば愕然とするような評価を、騎士たる少女は二人に対して下していた。

有空にしてみれば正当な評価である。

「……ちよつと、人の弟のよだれまじまじと見ないでよ」

「小煩い輩がいなければすぐに拭ってやれるんだがな」

多少寝汚くても、巫女オーラというやつなのか、子どものように愛らしいと思うばかり。実に幸せそうな海央の寝顔を見ながら、双子の姉は、敵と氷の合戦を小一時間程繰り広げるのだった。

勉強する時間よりも、冷戦を行っている時間の方が長いような気がするのはきのせいだろうか、と、大分彼らの変貌振りに慣れてきた使用人一同は思ったとか、思わなかったとか。

懸命にも誰もそんなことは口にしなかったので、真実の程は定かではない。

ただ、目を覚ました巫女様の笑顔で氷点下まで達していた空気が一気に常温になったので、彼らの巫女への崇拜度は上がったそうである。

ある侍女の記録と感嘆

この世界には、神様が賜れた一つの珠玉があります。

その至宝は、神の眷属でありながら人の身に転生を繰り返される輝かしい魂、「巫女」と呼ばれる幸福の種を落とす御方です。

イチヤ（壹夜）、フタミ（双海）、ミモリ（深森）、シセイ（詩星）、イツハ（乙羽）、リツカ（六花）、ナツキ（凧月）という七つの国々に順に転生なさり、生まれ落ちた国に神の恵みをもたらしてくださる巫女様は、とても尊い御方。そんなこと、生まれてすぐの幼子ですら本能的に知っています。

イツハで先代の巫女様が御隠れになってから、次はこのリツカに新たな巫女様がお生まれになるはずでした。巫女様は身罷ってから、そう間を空けることなく生まれ変わりなさいます。

それなのに、いつまで待っても、巫女様がお生まれになる気配はありませんでした。

何故かはわかりませんが、巫女様が生まれる番が回ってきた国の人間は、その誕生の気配を知ることができません。それを感知した瞬間、その国の人間は皆狂喜し、三日三晩宴が催されるものなのに、この国では、誰も巫女が生まれたことを知ることができませんでした。十年が経過する頃には、豊かな緑と産業とを誇っていたこの国はすっかり荒れてしまいました。

神に見捨てられた国だと蔑まれ、罵られ、作物は思うように育たず、国庫は空に近付き、内乱が起こり　最早、私を含め、国民の全てが、巫女様は永遠に喪われたのだとばかり思っていました。

何故この国の番になって巫女様がいなくなってしまったのか。これは何の罰なのだろうか、そう思いながら、日々を必死に過ごしてい

ました。

ある時、これが最後の贅を尽くした晩餐だろう、と国王様が催された盛大な晩餐会は、城下でも国民の誰もが参加できる祭りのようなもので、着実に滅びへと向かう国の、繁栄が終わる瞬間だと誰もが思っていました。

その最中、お城の舞踏室に急に現れた、二つの人影には、最後の仕事だと働いていた私も、驚愕を隠せませんでした。

空間を渡ることの出来る「加護持ち」は限られてはいますが、存在します。

けれどその日、私達は誰も解けるはずのない嚴重な結界に護られていたはずだったのです。

誰もが、一人の人物に目を奪われました。

艶やかで短い黒髪、黒曜石のような深い黒眼。その人がまるで天使のようにあどけない笑みを浮かべた瞬間、国の全ての民が、巫女様の帰還を知ったのです。

枯れかけていた草木が芽吹き、荒れた海が静まり、争いがおさまり、蔓延していた病がぴたりと猛威を奮うのを止め、人々は生きる希望を取り戻しました。

奇跡という言葉の意味を、私達は身をもって実感したのでした。

巫女様のお名前は、ミオ様と仰いました。異世界にて生まれ育ったのだという事実は公表されていますが、当初は大変驚いたものです。神の国でお生まれになったのかと思いましたが、どうやら違うそうです。

別の世界で誕生なさったミオ様には、双子の姉上様がいらっしやい

ました。

その方はミオ様によく似ていらつしゃいますが、ふんわりと柔らかな雰囲気をお持ちのミオ様と違って、凜とした清廉な印象を受ける方でした。

巫女の騎士であらせられると知った時は、深く納得した程に、心の鞞つよさを感じさせる方だったので。騎士様はアリス様と仰います。巫女様と騎士様付きの侍女になる栄誉を授かったことは大変喜ばしいことでしたが、当初の頃からは予想もしないような驚きが多く待ち受けた生活となり、情けないことに何度か気が遠くなってしまったことがあります。

何しろ、ミオ様がこちらにお戻りになられた際、我が国の四人の重要人物の方々が揃ってミオ様に求婚なさっただけでなく、それぞれが平素の振る舞いからは感じられないような言動を取られたのです。時期国王様として人気を誇る王太子、ルーゼリアス・リヒトヴァイン・ゼクス様は、非常に人柄、容貌共に優れた我が国の希望と言われてきましたが、まさか誰に対しても礼儀正しいあの御方が、あれ程情熱的にミオ様に求愛なさるとは思いもせませんでした。アリス様に本当に斬り捨てられはしないかと時々心配になります。ルーゼリアス様は精霊の加護を受けていらつしゃる稀な御方なので、おそらく大丈夫でしょう。

私が一番心臓が止まるかと思っただのが、鬼才と謳われる宰相、ライルデイン・サイラス様の変貌ぶりでした。何が起きてもほほ眉すら動かさない氷の美貌、あまりの無表情さに鉄面皮と噂されるかの方が、ミオ様を前にすると笑顔になるのです。私はもう流石にその表情を見ても若干固まる程度になりましたが、多くの使用人仲間達はまだ慣れないらしく、あまりの衝撃にこの間も一人侍女が倒れました。

他お二方もまた、今までとの変わりようが凄まじく、周囲の度肝を抜いています。

とても可愛らしくお綺麗なミオ様が男性だということにも驚きまし

だが、皆、愛情を掛ける相手として同性や異性ということに関しては特に思うこともありません。ミオ様がお幸せならそれで構いませんし、もし子どもが必要ならば養子を取ることもできます。何の問題もありません。

私はただ、侍女として、これからも巫女様を見守っていただけです。

最近、思うのです。この多大な驚きと少しの恐怖の混じった生活そのものが、私が立派な侍女になるための試練なのだと。

今のところ、私が一番慣れていて、些細なことでも倒れないからと頼りにされることが多くなりました。喜ばしいことですが仕事が増えて大変です。

ところで、最近とてもアリス様宛のお手紙や贈り物が増えています。どれも匿名ではいらっしやいますが、名立たる名家のご令嬢方からです。

この所、アリス様に心を奪われる女性が多くいらっしやるのです。

巫女の騎士の正装である純白の騎士服は、立てた襟元から足元の革靴に関してまで、華々しさとは無縁のごく簡素な意匠でありながら、アリス様の持つ凜々しさを引き立て、魅力を引き出すものになっています。動きやすいという理由でよく騎士服をお召しになっているのですが、騎士服姿で勇ましく立ち回れるアリス様の姿を見て、騎士の見本ともいうべくとても優しく紳士的に接してくださるために身分を問わずに色々な女性がアリス様に魅了されているのです。

大分見慣れたはずの私でさえ、時々ぼうつと見惚れてしまうのですから、アリス様の格好良さは尋常ではございません。

双子のどちらもが同性を惹きつけるというのはいささか不思議なことです。

何にせよ、あのお二人がこの世界にいらっしやってから、我が国は救われました。

ぎすぎすしていた空気もすっかり和らぎ、人々に心からの笑みが戻ったことを、私が生まれ育ったこの国が無くならず済んだことを、神様と、お二人に感謝致します。

不肖この私、リーナ・メルツヴィータは、いつまでも巫女様と騎士様のお役に立てるように精進して参りたいと思います。

ある少女の憂鬱と相棒

佐久間有空のため息をつきたくなる原因は、実のところ、弟の求婚者達だけではない。

『 ふむふむ、ミオの名は、海の真ん中という意味なのか。それはまた壮大な名前じゃのう』

「うん、その位広い心になってほしいって意味が込めてあるんだって」

のほほんど答える弟は、確かに広い心の持ち主になった。

……… 広すぎる心の持ち主に。危機感が無さ過ぎる程に。

『 して、アリスの名はどんな意味があるのかの？』

「あーちゃんはねー、心に空があるってことで、皆を見守ってくれるようにって意味らしいよ」

『 ほう、それもまた良い名じゃのう。二人とも良い名前を頂いたことじゃ』

そうでしょー？ とにこにこ笑う海央は本当に可愛い。……その両手にクッキーを手にして、頬張り続けていても。

ちなみに海央、あんたそれ二十五枚目……。

弟の底知れない胃袋からは目を逸らし、有空は呆れたような声を発した。

「……見守る役目も疲れるわよ。で、アンタは魔剣のくせに、何でそんなに呑気に神の眷属とおしゃべりできるわけ…?」

ふよふよと、空中に漂う一つの人影。

白っぽい長い髪に銀色の瞳をした、可憐な少女のようなそれは、実は人間ではない。

『別に、悪さをするわけじゃないからの。我はとっくの昔に魔の眷属とは違う存在になっておるし』

「……あ、そう……」

頭が痛くなってきた。

仮にも魔剣と言うならば、聖なるものとは対立しているのが普通ではないだろうか。

今更この世界で常識を求めてはいけないと思いつつも、ある意味王道を走ってきたばかりに、これはちよつと予想外だった。

そう、実はその少女の正体は、有空が宝物庫を漁っていた時に偶然発見した、一振りの剣であった。

隅っこの方で、埃まみれのがらくたのようなものと共に壁に立てかけられていた一本の黒い剣。

吸い寄せられるように手に取ると、それは表面の黒い部分が弾けるようにして飛び散り、美しい銀の剣となったのだ。

重さは軽すぎず重すぎず。ぴったりと手に馴染んだ。

伊達に剣道が続けてきたわけではない。自分に合った竹刀の選び方は大分わかってきていたつもりだったが、これほどに好みの重さに会うとは思ってもみなかった……それも、本物の剣で。

すらりと鞘から抜けば、ただの剣ではないと何故か理解した。

そしてその夜だっただろうか、いきなり剣から一人の少女が現れた

のは。

『ふむ、ようやく現れた我が主はそなたか。まさか巫女の騎士とは……運命も奇異なものじゃ』

茫然とする有空に向かって、真つ黒なゴスロリのドレスを身に付けた美少女はそう言つて、優雅に礼を取つて見せた。

『我が名はアルジエンティア。太古の昔に魔人と呼ばれたものなれの果て、つまるところ魔の剣じゃ。新しき我が主よ、これからよろしく頼むぞ』

有空の見つけた剣は、喋る所か魂が憑いている剣だったのである。ちなみに今まで鞘から抜くことが出来た者はいなかったとか……どんな勇者的展開ですか。魔剣だけど。

アルジエンティア　アリア曰く、これまで好みの人間が現れなかったから抜かせなかったらしい。

私は気に入ったのかと問えば、魂の性質が気に入ったとか。美味しそうだと言われた時には、危うく城のバルコニーから投げ捨てる所だった。

そこまではまだいい、いいのだが。聖なる巫女である海央と普通におしゃべりをする所もまだ、許せる。しかし、だ。

「……アリア、それは一体何なの」
『む、しまった、見つかつてしまったか』

普段は幽霊のような肉体を持たない体でぶかぶか浮いているアルジエンティアだったが、短い時間であれば、実体化できるらしい。

その時間に彼女はよくよく、有空にとっては非常にろくでもないことをしてくれるのだ。

『なに、お主ら双子はあまりにも麗しいと人気があるのじゃ。アリスの賃金の足しにもなる』

「だからって勝手に人の人形を作って売りさばくんじゃない！ あーもう、アンタは本当にーっ！！」

実体化していたアルジェンティアの手に握られていたのは、手のひらサイズの二つの小さなマスコットだった。

実に精巧で可愛らしく　佐久間姉弟にそっくりな。

人形を奪い取り、背後にあつたたくさんのそれをも掻き集めると、布袋に詰める。

廃棄処分決定。

一発殴つてやると振り返れば、もうアルジェンティアの姿は無かった。

「アリアーっ！！」

気まぐれに姿を現す剣の魔人には、ほとんど困っている。

何しろ、剣を使っている時は別にいいのだが、そうでない時は暇だと、何をしでかすかわからないのだ。

最近は金もつけに目覚めたらしく、何故か手先が器用でセンスも良かったために、こういった人形を作ったり絵を描いたりして売りさばいていた。

それが別に風景だとか動物だとかなら問題がないのに、何故か全て有空と海央をモデルにしたものばかり。

自分の絵や人形がどの誰ともわからぬ輩の手に渡っていても嫌だが、それ以上に、あの変態達が海央を模した物体を手に行っていたらと考えるだけで怖気が走る。

何度壊そうとしても、銀の魔剣はびんびんしている。有空が怒っている時は絶対に、剣に同化してアルジェンティアは姿を現さないのだから、持ち主の鬱憤は溜まるばかりだった。悪戯を大目に見て有り余る程に、魔法攻撃を緩和するとかどんなものでも斬ってみせるだとか能力が高く、これ以上のパートナーは望めない程だから、有空は手放せないのだが、いい加減疲れる。

彼女は知る由もなかったが、双子の人形は非常に高値で取引されており、海央の人形はもちろん、有空の人形もまた、彼女に心を奪われた女性達によくよく好評であったりした。こうしてまた、双子の人気は高まるのであった。渦中の少女の望まぬところで。

これも一種の愛情表現じゃ、なんて銀の少女は言っけれど、有空にとっては迷惑極まりないことだった。

ある少女の憂鬱と相棒（後書き）

久々ですが少々短かったですね……。
主人公の苦勞は色々あるんです。

ある少女の憂鬱と第三の男

はあ、と少女は今日もまた、無意識の内にため息を吐いた。それに気付いて、慌てて口元を押さえる。

別に今更ため息を吐いた事実がなくなるわけではないが、つい先日、よくよく世話をしてくれるある侍女に言われたのだ。

最近ため息を吐かれることが多いですね、と心配そうに。

ため息を吐いていると幸せが逃げていく　という言葉信じているわけではないが、この所確かにため息を吐きすぎていることを自覚した。

何だか、余計に幸が薄くなる気がして、ため息を吐くまいと思っていたのにこれだ。

「……………疲れてるのよね…多分…」

まあ、地球にいた頃はこんなに毎日気を張っていなかった。

同年代の気軽に悩みを打ち明けられるような人物がいればいいのだが、自分の立場からしても、周囲の認識からしても、どうしたら変態四人から弟を護れるか、なんて言っても事態は解決しないにちがいない。

どうしてか、あの四人は皆に人気がある。有空からしてみれば過度のセクハラと言える行為も情熱的なアプローチ、で済まされるのだ。どうも、皆、巫女である海央とあの四人の誰かがくつついてほしいという考えの元、目にフィルターが掛かっているに違いないと思う。一番価値観が近いと思われる剣の師もまた日々苦勞しているようだし、ここでの同士は皆無に近い。

再び零れそうになったため息を飲み込んで、ちらと視線を移す。そこにはもう、恒例となつてしまった、中庭でお茶をする双子の弟の姿。と、もう一人別の人影。

一部を結んだ、珍しい青みがかつた銀の髪を背に垂らし、海央に向かつて何やら話しかけている人物の名は、リオルキーツ・エルノーヴァと言つた。

有空の大切な弟に求愛している四人の一人、だ。

陶器のようにすべらかな肌、紫色の瞳は妖しい魅力を放つ、彼の者は名高き魔法使い。というのは吟遊詩人の弁であるとか。

確かに、リオルキーツは精巧な人形じみた美貌の青年だった。

女の有空が嫌になる程に中性的な美しさを持つ、どこか儂げな美青年。年。

それこそ女装させたら国を一つ落とせそうな美しい青年、なのだけれど。

「へー、きれいな石だね、リオル。え？俺にくれるの？嬉しいけど勿体無いよ、女の子の方が欲しがらんじゃないかなー」

「……ミオに、よく似合う」

「うーん、でも、腕輪なんてあんまりつけないよ？」

「いい、もらつてくれれば……」

「わかつた、ありがとう」

にこ、と海央が可愛らしくお礼を言った瞬間。彼の視界から、青銀の髪 of 青年が消えた。

「海央、それ、ちよつとサイズが合わないみたいね。調整してもらいましょう」

「あ、あれ？あーちゃん……うん、そうだね。でも……リオルは？」

「さあ？ 用事が済んだからもう言っちゃったんじゃない？ 魔法使いだもの、ぱつと消えてもおかしくないでしょ」

「そっか、そうだね。すごいなあ、リオルは魔術が簡単に使えて」

単じゅ……もとい、純粋な海央は、あつさり和有空の言うことを信じた。

そして、タイミング良く新たに追加されたお菓子に意識を奪われ、目をきらきらさせながら、海央はそちらを攻略しにかかるのだった。笑顔の侍女に目線で礼を伝えて、有空は、海央が見ていないことを確認してから、近くの茂みに近寄る。

「……ちよつとそこの変態、さつきあんた海央に汚い液体ぶっかける所だったでしょう」

「……ミオの姉とは思えない。暴力的、下品……」

淡々と呟かれた言葉に、ぴきつと有空の額に青筋が浮かぶ。

「私をそうさせたのはあんたら変態四人組でしょうが！！ こちとら日本にいた時はもつと清らかだったわ！！」

茂みの中に入ると、有空は抑えた声音でそう言い捨てた。勿論、片手は既に剣に掛かっている。

先程、あつという間に消えてしまったように海央には見えただろうだが、実の所、有空に茂みの方に吹っ飛ばされただけの青年は、こちらに背を向けていた。

何故かは少女もよく知っている。その理由のために、先刻この青年を蹴飛ばしたのだから。

肉体が強化されたために、ひよろい優男を宙に浮かせることも簡単にできるようになった。最早地球にいた時とは違うなとしみじみ思ってしまう。

「……俺も、ミオには流石に掛からないように、移動するつもりだった」

「間にあつてたかどうか怪しいわ……じゃなくて、その変態癖どうにかしなさいよ!」

青年はそのほつそりとした手で顔を押さえている。後ろを向いていても見える、地面に滴り落ちる赤。

「何で、海央に欲情して鼻血噴き出すような変態が、国一番の魔術師なのかしら……」

堪えていたはずのため息がまた出た。もう飲み込む気力もない。

リオルキーツ・エルノーヴァは、この国で一番魔術に長けた人物。この世界にはファンタジーなことに精霊と呼ばれる、巫女とも繋がりのある神の眷属がいて、自然と共に生きている。

人間に友好的な彼らは、時に気に入った相手に加護を与えたり、魔術師と呼ばれる人々の呼びかけに応えて、火を熾したりモノの場所を移動させたりと、不思議な力を貸してくれる。

精霊の加護を受けた人間は加護持ちと言われ、軽くお願いするだけで精霊に力を借りることができるのだが、一般的な魔術師は、そのお願いのために供物を用意したり長々とこちらの意思を伝えるための呪文を紡いだりしなければならぬ。

リオルキーツの異色な所は、精霊に頼らずに何故か魔術を使うことができるという奇異な力を持つことだった。

そんな人間はほとんどいない。彼は自らの内に宿る力で魔術を操る。だからこそ、彼の魔術は精霊魔術ではなく、魔法なのではないかと言われるのだ。

魔術とは元素から成り立つもの。

魔法とは、摩訶不思議な方法、すなわち無から有を生むもの。

どっちも現代日本人の有空からすれば同じように変だと言うしかないが、つまりそういうわけで、リオルキーツはかなりの有力者なのだ。

黙っていれば最上級の美貌だし、能力も高いというのに　残念なことこの青年もまた、変人だった。

「それにこれ！　まああなたなんか変な術掛けたでしょ！　さっさと解きなさい、捨てるわよ！」

「……犬並みの嗅覚……」

ちっ、と小さく舌打ちしたのがわかった。思わず剣の鞘で殴ったが、透明な壁に弾かれた。

これだから魔術は厄介なのだ。

無言で、先程海央がもらっていた腕輪を差し出せば、リオルキーツが何事か呟いた。

有空は、青年がたった一言呟いただけで、腕輪から漂っていた嫌な気配が消えたことに気付く。

この青年は、海央に対してよく鼻血を出してよからぬことをしかけるだけに留まらず、こうして海央に贈り物をしては、それに魅惑の術だとか服従の術だとか、小癪な魔術を掛けているのだった。

本人曰く、強力なものではないから問題ない、ようはそれをきっかけにしてこちらを見てもらい、頃合いを見計らって術を解くつもりらしいのだが　容認できるはずもない。

ああ、何故海央の求婚者はこんなばかりなのか。

救いは、四人ともそれぞれ海央と仲を深めていつているようだが、あの天然産は完璧に全員の好意を「友情」だと思っていることか。

こうして、弟の預かり知らぬ所で、姉は一人苦勞をしているのだった。

ある少女の憂鬱と第三の男（後書き）

三人目。人物像に悩みました。

ある少女の憂鬱と第四の男

わあああ、と歓声が沸き起こり、観客席から同時に花弁が降ってくる。

ふう、と息を吐き、剣を腰に収めた少女は、呼吸を整えると、上座に向かつて優雅に一礼する。

そのあまりの凛々しさに見惚れた女性達が、ふらつと失神しかける。本人が知ったら、どれだけ繊細なんだ、というか女ですからと引き攣りそんな事実だったが、彼女はそれ程に『騎士』という言葉が相応しい様だった。

そして広い闘技場に、新たな人物が上がる。

地球で言うなれば爽やかな体育系、といった所だろうか。ただし、地球ではお目にかかれないような美形だが。

にと不敵な笑みを浮かべ、炎のような赤い髪に朱色の瞳をした青年は、筋骨隆々というわけではないが、程良い鍛えられ方をした肉体を持っていた。

精悍な容貌をしながら、その戦闘センスは鬼才と謳われる。

「よお、邪魔娘。知ってるか？ 今日お前に勝てた奴は、王から何でもひとつ願いを叶えてもらえるんだぜ」

びく、と少女の眉が跳ね上がる。

歪んだ唇から、地を這うような低い声が紡がれた。

「へえ…私に勝てるんでも？」

両者の背後にはまるで、猛々しい竜と虎がせめぎ合っているかのよう
に不穏な空気が漂っている。稲妻が大地に落ちる幻聴が聞こえた
者もいたとか、いなかったとか。

ただならぬ空気に青ざめつつも、気力で足を地面にしっかりとつけ
ていた審判が開始の合図を出した時　両者は、目にも留まらぬ速
さで剣を引き抜いていた。

青年の剣が剛であるとすれば、少女の剣は柔。前者を動とすれば後
者は静。どちらもその腕は優れていた。否、技術的な面からすれば、
まだまだ少女は青年には遠く及ばない。されど彼女には特筆すべき
点がある。それは神の眷属より授かりし並々ならぬ身体能力と、偶
然手に入れた銀の魔剣だ。

青年はただの騎士ではなく、魔術をも身に付けた魔術騎士と呼ばれ
る存在だった。通常、魔術には物理的攻撃は効かない。されどそん
な常識を丸々と覆す存在が、宝物庫の片隅で忘れられていた経歴を
持つ、その魔剣。

神速の剣技が魔術の炎と共に繰り出された時、少女は迷わず自身の
剣でそれを避けた。真っ向からぶつかるのではなく、勢いを殺すよ
うに薙いだのだ。ただの剣であれば一瞬にして砕け散る所を刃こぼ
れ一つなく、少女の愛剣はきらりと銀色の光を弾く。次いで、返し
様に青年の胴を薙ぎ払おうとして、反転して避けられ、炎の球が投
げつけられた。それを難なく、魔剣は叩き斬る。

思わず、観客は手に汗を握る程に、青年と少女は一步も引かぬ戦い
をしていた。様々な要因が絡み合って伯仲している力。徐々に徐々
に互いの体力を削り合い、浅い傷から深い傷まで刻み合う彼らの戦
いが終わりを迎えたのは、日が沈みかけてから。

時間にして五時間が経過しようというのに向に決着がつかなかっ
たこともあり、王が止めるよう命じ、彼らの試合　いや、最早死
合いに近い雰囲気があった　は引き分けという、当人達にとって

は納得のいかない結果に終わり、褒美は山分け、何でもというわけではなく、二人とも、ささやかな願い事だけをひとつ叶えてもらえることになった。

そこで青年が願い出たのは、少女が眉間の皺を深くしつつも渋々受け入れざるを得ないもの、少女が望んだのは、青年を含む数人が苦々しい思いを抱きつつ承諾せざるを得ないものだった。

「ミオ！ 新しい菓子を作ってきたんだ、食べてくれるか？」

「わあ！ おいしそう、食べるー！！」

差し出された、バスケット一杯の甘い匂いの漂う焼き菓子に、海央は瞳を輝かせた。その愛らしさに青年は相好を崩し、一口で食べるには大きい菓子を割ってやる。

「今日は中にリツアの実を甘く煮て詰めてみたんだ、好きだっただろ？」

「うわあ、本当！？ うん、すごく好き！！」

口に入れるのが待ちきれない様子で、飴色のジャムを一心に見つめる可憐な少年。その熱意が自分に向けられたらと想像するだけで胸が熱くなる思いをしながら、青年はにこやかに笑って手すがら菓子を与えた。

リツアというのは地球という林檎に瓜二つの果実だ。名前が違うだけでほとんど同じものだろうと佐久間姉弟は考えている。この世界の食べ物、驚く程地球のものによく似ている。生態系が近いのだろう。

佐久間海央は、基本的に何でも食べる。中でも甘いものが好きで、日本にいた頃は近所にあった洋菓子店のアップルパイが好物だった。

た。

目の前にいる青年は、あの店のものよりも美味しい菓子を作って、いつも差し入れしてくれる。それは彼にとってとても喜ばしいことだった。

巫女である少年の中には、美味しいものをくれる人、イコールいい人、という方程式がある。お陰で、変質者に飴をもらってついでに行きかけて、幼い頃から姉が何度苦労したことか。

あーん、と差し出された菓子にかぶりつき、海央は心底幸せそうな笑みを浮かべた。

「おいしい!!」

口の中で広がる甘い感覚にうつとりし、頬がとろけそうだった。そんな様子を見て、青年は思わず手を伸ばして少年に触れかけばちん、と不可視の壁に弾かれた。

「御触りは厳禁だぞ、騎士殿」

どごその怪しい店かと言いたくなるような台詞をのんびりとのたまい、空中をだらけた姿勢でぶかぶかと浮かぶ、ゴスロリ少女。全身からやる気の無さがにじみ出ているが、彼女は仕事をきちんと全うしていた。

「少しぐらいいいだろうに」

「約束を違えるとアリスが烈火のごとく怒り狂うからの」

ち、と軽く舌打ちをする青年に、ゆつたりと白銀の髪の少女は答える。

その言葉を聞いて、菓子を頬張りながらも、海央は心配そうに首を傾げた。

「アリア、あーちゃん大丈夫かなあ…」

「心配はいらぬよミオ。アリスは久方ぶりに十分な休みを得て眠っておる。約束の期日までは何があるうと起きぬだろう」

普通、人間というものは寝溜めというものはできないはずなのだが、現在ある少女は、冬眠中の動物のように深い眠りに就いており、ここ二日一秒たりとも目覚めていない。

「まあ、いないだけ邪魔が入らないか…」

海央に聞こえない大きさでぼそりとそう呟いて、青年は明るく微笑むと、触れるか触れないかという距離に詰め寄り、甘く囁いた。

「なあ、海央。好きだ。俺と一緒に暮したら、毎日好きな菓子を食べさせてやるぜ？」

堂々と口説いている。まさに直球。有空に『オープンな変態』と言われるその青年の名は、レンスロット・アリオン。燃えるような赤い髪に朱色の瞳の精悍な美貌を持った人物で、海央の四人目の求婚者。世界でも一二を競うと謳われる剣の腕を持つ、多くの武勲を上げてきた鬼才でありながら、趣味はお菓子作りという外見に反した所もある青年で、有空と何かと剣でぶつかりあう仇敵。この国の騎士団を纏める騎士長という職に就いている。情熱的に巫女を口説く様は、使用人達も赤面して視線を逸らす程熱心なのだが、いつでもものほほんとお花畑の中のような自分の世界を持つ海央は、にこにこ笑うだけ。

「うん、俺も好きだよ。レンモリオルもライルもルーも、勿論、アリアとあーちゃんも皆好き」

一緒に暮らすって、レンも離宮に住むの？ と、海央は首を傾げる。毎日会ってるしすぐ側に住んでいるのだから、わざわざ越してこなくてもいいんじゃないかなあ、と。

ややレンスロットを不憫に思う程に天然すぎる海央に、アリアは笑いをかみ殺した。

どう考えても恋愛の「好き」「愛してる」で口説いているのに、海央ときたら恋愛感情をどこかに落としてきたのか、周囲の人間の愛情は友情・家族愛のような感情だとしか思っていない。確かに流れやすいために、既成事実を作られたら一貫の終わりかもしれないが、手を出せない状況では、四人の求婚者は皆、海央との仲を深められることはないだろう。

『聖女祭』という、巫女を称える祭りが終わって、二日が経った。

初めて全ての国民の前に姿を見せた海央はその笑顔で皆を虜にし、絶大な人気を集めた。

そして、巫女に剣を捧げた騎士、有空の戦いはトーナメントで勝ち上がってきた者五名を叩きのめし、更に騎士長と剣を交えるという役割があった。

絶対的な力を見せつけ、不穏な考えの輩を牽制する意味もあるその剣術大会は、騎士長と巫女の騎士の引き分けという結果に終わり、人々を大いに楽しませた。二人に与えられたささやかな望みを叶える権利という褒美を行使した結果が、今。

レンスロットは、海央を独占する日を一日。有空は、何も心配せず休息を取れる日を三日。ついでに言うと、誰にも海央に指一本触れさせないことを約束に盛り込み、アリアを護衛として付けるという徹底ぶり、有空は現在、死んだように眠っている。

二人の褒美には差があるかもしれないが、元々、有空はこの世界に来てからほとんど、休む時間がなかった。自国の民のせいであまり巫女の騎士をこき使つと神から天罰が下るかもしれないという配慮と、自分だけ抜け駆けをしてという残る三人の男達の非難があつて、

レンスロットは一日だけ、という期間限定がついたのだ。

今日がその、海央を独占できる日。ただしオマケの護衛魔人つき。空振りしているが、口説くのはやめない。

二人の時間を楽しみながら、一日は瞬く間に過ぎていった。

あの女の邪魔が入らないっていいな、とレンスロットは至福の時を過ごしたが、それから数日後、再び少女との攻防は再開され、よくよくこの日のことを思い出すことが多くなるのだった。

ちなみに有空は休息中、深い眠りについていたにも関わらず、男達が海央にちよっかいをかけようとする度に、ぴくりと眉間に皺を寄せていたという。

ある少女の憂鬱と第四の男（後書き）

四人目出ました。さて求婚者の順番はやっと終わりだ！このあとはのんびりいきます。もういつ終わってもいいんじゃないだろうか。山も落ちもなさそうな…。

ある少女の憂鬱とある男の苦勞

佐久間有空という少女と佐久間海央という少年が、マンホールの穴から異世界へと渡ってから。

双子の内、弟は神の眷属たる巫女だとされ、姉はその守護者である騎士だとされた。

異世界召喚のセオリーに従って、常人であつたはずの少女には、こちらの世界に適応する為に言語能力と身体能力の向上という能力が付与されたわけだが、例えるならそれは、何も知らぬ子どもに大工道具を一式与え、使用方法や製作方法を一切教えぬまま、木材で本棚でも何でも作成してみろといった状態。

極端な話だが、要はいくら才能があろうとも、その開花の切っ掛けがなければ意味がないということ、ただの女子高生にいきなり真剣を持たせ、上手く扱ってみると言われても土台無理な話なのである。

有空は、小学生の頃から剣道を習っていた。近所にある道場に通い、毎日鍛錬をしていたのだ。

一つの武道を身につけるのは、かなりの労力や時間を要する。

普通は、剣道を習いながら他の武芸に浸る余裕などない。

だがしかし、彼女は剣の道を究めることに興味があつたわけではなかつたので、一週間の内に三つもの道場に通っていた。

すなわち、剣道、空手、合気道。それらは全て、ただ一人の大切な片割れのために身に付けたもの。

生まれ落ちた時をほぼ同じくする誰よりも身近な存在、双子の弟のために学んだものだった。

佐久間海央は、生まれた時から大変愛らしい子どもだった。勿論良く似た顔立ちの有空も一緒に、可愛い双子ちゃんと持て囃されたも

のだったが、海央の容姿以上に周囲を引きつける雰囲気は圧倒的で、しばしば厄介な出来事に遭遇した。近所の人々から妙に羨望の眼差しを頂いただけならまだしも、変質者に付き纏われること数知れず、誘拐されかけること両手では足りない程。

そんな弟を護ろうとするのは当然、片割れたる有空なわけで……大人に子どもが応戦するには自衛の力が必要だと、彼女は武道の門を叩いたわけだった。

余談だが、武道における有段者とは相手の力量をはかる上で目安となるものであり、周囲の評価にも直結するにも関わらず、有空は中々昇段審査を受けようとせず、大人達に懇願されて渋々受審したという過去がある。

その理由は、有段者となれば一般人よりもその力の行使に規制がかかるということにあった。彼女が武道に身を浸したそもその理由は、それを身を守る術とし、引いては弟を護る力とする為であったから、そのことに制限がなされれば不都合であったのだ。

けれどまあある程度の周囲への牽制も済ませたし、周りにはうるさいし、何より海央が「受ければいいのにー」なんてのほほんのたまたたた為に……結局は有段者になってしまったわけだった。

しかし、そんな彼女の武道の腕と、武器を持った騎士という役柄は隔たりがある。いくら剣道を習っていたといつても、竹刀や木刀と真剣では大違いだ。

だからこそ、弟の身を護る為に彼女は即座に使用できる武器と剣の師を必要とし　前者は幸運にも手に入れ、後者はほぼ強引に押し掛けた。

今でこそ有空の方が『巫女の騎士』の力から勝るとも劣らぬ実力を得てしまったが、彼女の師はこの世界でも有数の実力者。

この国リツカの次代を担う王太子、ルーゼリアスの第一護衛騎士にして乳兄弟たる、黒髪に赤い瞳の年若い青年　カイルアース・ライズフェルト。

その実力は騎士長とも肩を並べると言われているのだが、彼は何故

かあまり表に出たがらないので、護衛騎士止まりだった。現王佐を父に持つていることも影響しているのだろうが、王太子の御守はなかなか疲れる様子。

カイルアースはよくよく、ため息を吐いているように思う。

佐久間有空からしてみれば、ある意味、こちらの世界で今まで接してきた人間の中で一番まともな性格をしており、生真面目かつお人好し。それ故に気苦労の絶えない人物だ。

いくら最初は拒んでいたし、渋々だったとはいえ、無理やり頼んで剣の稽古の相手になってくれたことから、彼がいかに押しに弱く、人の頼みを無下にできない人間かは知れている。常識的ながらに非常識に慣れざるを得ない彼の環境は、彼女の立場とよく似ていた。今ではもう、技量的な面では劣れど、超人的な力を与えられている有空はあつという間に剣の扱い方を覚えたので、両者の実力は伯仲しているか、有空が越えてしまっただろう。

けれども彼女にとって、カイルアースは短い間だったとはいえ師に違いなく、海央の次に近しく思える人間。相棒の少女は人間ではないので省く。だった。

友情のような敬愛を抱いているとっていい相手、それがカイルアースだ。

だからこそ、彼の顔を立てたことは何度かあつたのだが。

「…カイル。流石に、次は斬るから」

「…すまない」

はー、と嘆息する青年の手には、意識を失った彼の主の襟首が握られている。

普段ならば決してしない不敬だが、流石に愛想が尽きたのか、扱いが雑だった。

無理もない。

いくら乳兄弟とはいえ、いくら友人とはいえ、主とはいえ　二度も世界の至宝である巫女たる少年の寝室へ夜這いに行けば、いい加減嫌になるだろう。

見放す訳にもいかないの、放っておきたくても助けなければならぬ。

主の恥態に頭を悩ませながら、何故自分はこのことをしているのかと内心で答えの出ない自問をしつつ、目が少しも笑っていない少女に頭を下げる。

王太子が望み、またカイルアース自ら志願して彼は休暇などほぼない、王太子の筆頭護衛騎士でありながら、騎士団の仕事もこなすという激務の只中で実直に働いているというのに、最近に変態な主人の尻拭いという嫌な役回りばかり回ってくるのだ。城の医務室によく頭痛やら胃痛やらの薬をもらいに行っている話は皆が知っていた。

もういいからさっさと連れて帰って、と口に出さずとも顔に書いている弟子にもう一度謝って、カイルアースは巫女の自室を後にした。自分の姉と求婚者の攻防など知らずに無邪気に眠りこける巫女だけが、彼にとっても癒しだった。

それは、やや不敬だが、犬猫や綺麗な景色に心を和ませる感覚とよく似ているのだけれど　有空は何故かカイルアースも海央に気があるのだと勘違いしており、時々釘を刺される。見当違いだと誤解を解く機会は中々訪れない。

カイルアースは室内で愛でられのほほんとした幸せな子犬も好きだが、警戒した様子で吠え散らかしつつ、主人や認められた相手には懐く番犬の仔の方が好ましく感じる質だ。

今のところ、彼が有空に抱いているのは恋情ではないが、毎日毎日気を張って暮らしている彼女を気にかけていることは確かだった。

師匠の心、弟子知らず。

有空が逆に苦労人なカイルアースの身を案じており、特に将来禿げ

ないかな……なんて失礼な心配までしていることを知ったら、彼は
暫く立ち直れないだろう。

ある少女の憂鬱とある男の苦勞（後書き）

師匠のこと。恋愛フラグは今のところ立ちそうでは立ちません。彼らには恋愛してる余裕がありません。

ある少女の憂鬱と豊穣祭（前篇）

日本にいた頃にも、様々な季節のイベントがあった。

ただし母国は宗教にあまり傾倒していない不思議な国だったので、様々な宗教的イベントをちゃんぽんにしており バレンタインやクリスマス等は独自の様式で盛り上がったものだ。

この世界の人々は皆、大抵が唯一神を信仰している。ただし、神様が何かをしてくれるという概念はほぼ無く、人々を見守ってくれる大きな存在、という感覚らしいが。

とにかく、その信仰故に当然のように、神に感謝する祝祭日は存在するわけだ。神よりも、その眷属として身近な巫女の方が日常的には讃えられがちだが、その日は神の恵みに感謝し、豊穣を祝う祭りの日。どこの世界も似たようなもので、一言で言えば普段世話になっている相手や家族、恋人に感謝の意を伝え、共に祝う日なのだ。

実際は収穫祭、というよりも。

「…この世界でいうバレンタイン、かな…」

祭り事は嫌いじゃないのだが、現状的に厄介であることは間違いない。

お祭りと聞いて屋台の食べ物への期待感で一杯な海央は、いつも以上に周囲に花を撒き散らしている。

その様子を微笑ましさと呆れを織り混ぜた微妙な生温い視線で見ながら、有空は内心溜め息をついていた。

日本のバレンタインといえばチョコレート。本命チョコならぬ義理チョコに友チョコ、逆チョコなるものまで流行っていたが、海央や

有空はチヨコを貰う側で、あげたことなど殆ど無い。

貰うと言っても、同性から明らかに本命と思わしきチヨコをいくつも贈られ辟易したり、海央のチヨコには怪しげなものが混入してそうなブツがあつて騒ぎになったりと色々色々あつたが、それはさておき。

『豊穰の灯』と呼ばれる今回の祭りでは、男女に関係なく、互いにあるものを贈る習慣がある。

それは『月灯花』という名の花だ。

各国で指定される花の種類は違ふのだが、月灯花はこの国にしか生息しない花で、初めて見た時はファンタジーだなあと感嘆する程に綺麗なものだつた。

月灯花には二色ある。一つは淡い白銀に蒼空を混ぜたような蒼銀の花と、もう一つは、明るい陽光に朱を落としたような朱金の花。前者は蒼花、後者は朱花と呼ばれるている。

そのどちらもが、独特な透明感のある硝子のような繊細さを持ち、五枚の花弁が包み込むように守っている中央には、蛍の灯りのように仄かな橙色の光が存在していた。

花を摘んでしまえば、そのままだと灯は三日と保たないらしいが、水に浸けて置けば一週間は大丈夫だという。

灯が何で出来ているのかはこれまたファンタジーな要素らしくよくわからないが、その光で虫を誘い、花粉を運んでもらうのだという点は、地球と同じく、花という種の知恵だろう。

二種類ある月灯花を用いる『豊穰の灯』では、蒼花と朱花で贈る意味合いが異なり、一般的に互いに贈り合うのは蒼花であるらしい。

朱花は特別な相手にだけ贈るものだとか、現代日本で言うところの蒼花が義理チヨコ、朱花が本命チヨコ、といったところだろう。

母の日のカーネーション然り、その日は月灯花の値段が高騰するのではと思いきや、そんなことをしては神への冒瀆だとばかりに、各色一人一本分は国から無料で配られ、花売りも普段と同じか低価格で販売するらしい。勿論、独占販売も禁止されている。

国の人々が贈り合うという風習はとても素敵だとは思っただが
有空にとっては、『豊穰の灯』は少々頭の痛いイベントだった。
理由は最早、言わずもがなだが。

「ミオ、豊穰の灯では私にも花をくれるかい？」

銀髪の皇太子の問いかけに、海央はあくあくどーナツのようなも
のを頬張りながら、こくりと頷いた。

「ん、いーよ」

春の柔らかな日差しに喻えられるという美貌を更に甘く綻ばせて、
感極まって抱きつこうとしたので、彼は危うく腕が無くなる所だっ
た。

「美味しいですか？」

「うん！ あ、食べたい？」

「いいえ、ミオに差し上げたものですから。……代わりと言っては
何ですが、今度私に月灯花を下さいませんか？」

「いいよーあげるー」

チヨコレートに似た甘いお菓子を次々と口にしつつ、にこにこと言
葉を返した天使は、金髪の宰相に溶けて指についた菓子を舐め取ら
れそうになった所で、間一髪、銀の一閃に救われた。

冷酷な美しさを持つ悪魔は、かろうじて服の裾が裂けただけで済み、
毒舌を吐くも、それを気にも留めず、姉は片割れの指をタオルで拭
ってやった。

「……これ、ミオに」

「ありがとー。もしかして、この間言ってた、よく眠れる枕？」

「……そう。良い夢が見られるように、魔法をかけてある」

「へえー！」

「……ミオ、俺も、ミオから花をもらいたい」

「うん、わかった！ ……あれ？ あーちゃん、なに？」

嬉しそうに、ふわりとした心地よい肌触りの淡い色をした枕を抱えていた所、姉に呼ばれて天使は退室した。

お菓子で釣っている間、枕は気の毒そうな顔をした白銀の美少女

魔剣 によって、一度徹底的に調べられ、安眠効果以外に掛かっていた全ての魔法を解除されてしまった。

天使の笑顔に興奮して出かけた赤い液体を我慢しながら、妖しい魅力を持つ青銀の髪の魔法使いは、自分が掛けた魅了だとか誘惑だとかの魔法を無駄にされて、惘然とした。

「なあミオ。お願いがあるんだ。聞いてくれるか？」

「なにー？」

「豊穡の灯で、ミオから月灯花が欲しいんだよ。くれるなら、俺の作った菓子は全部ミオのものだ」

「あげるあげる！ わあ、全部食べていい！？」

「ああ、ミオのためなら、いくらでも作ってやる」

精悍な顔立ちを優しく和ませて、騎士長は骨張った大きな手で白い頬を包み込んだ。顔を寄せようとした瞬間、目の前から愛しい人物の姿が消える。

「海央。私この人と手合わせする時間だったわ。アリアと一緒にお昼寝してきたら？ いい天気よ」

「そうなんだ！ うん、ひなたぼっこしてくるね。アリア、行こー」

天使が消えた途端、部屋の中は戦場になった。

そんな風に、渦中の巫女は何も気付かぬまま、姉は日々攻防を繰り返し、祭当日を迎えるのだった。

ある少女の憂鬱と豊穣祭（前篇）（後書き）

久々です。友人提供のネタから出来た話。

ある少女は気まぐれ連作なので、ネタが降ってこないと更新できないんですよね…。

この話は前後篇かな。多分間あきますが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8107i/>

ある少女の憂鬱と。

2011年8月11日07時40分発行